

『源氏物語』 女からの贈歌考

——花散里を例として——

風 岡 む つ み

はじめに

『源氏物語』における女からの贈歌には、男側からの言葉や消息といったきっかけを持つものと持たないものがある。この違いは、単に女側の立場や性格の違いというだけによるものだけでなく、その場面や当時の慣習に基づくものもあるだろう^①。

本稿で考察の対象とする花散里は、作中で詠み交わす六回の贈答のうち五回が光源氏との間で交わされるものであり、その全てが花散里側の贈歌によって始められるという特徴をもつ女性である。さらに、この四回の花散里の贈歌は、男側からの問いかけや消息といったきっかけをもたないものであり、『源氏物語』における女からの贈歌を考える上で重要な人物であるといえる。

本稿は、花散里と光源氏の間で行われた贈答を対象とし、『源氏

『源氏物語』 女からの贈歌考

物語』における女からの贈歌というもののあり方について考察するものである^②。

一

『源氏物語』における女からの贈歌についての研究は、鈴木一雄氏からはじまる。

鈴木氏は、『和泉式部日記』における女からの贈歌を踏まえ、『源氏物語』における女からの贈歌について、『源氏物語』でも、やはり女からの贈歌の場合、男からの贈歌という常態とはちがった表現効果をねらったものと考えられるのである。『和泉式部日記』の場合と異なり、作者の配慮は、そのときの場面・状況の緊張や女の立場の強調だけでなく、多くの作中女性の性格づけにまで利している面は、やはり無視し得ないであろう^③と述べられている。そして、

一

次のように述べられる。

女側の性格のうえにもつよくひびく例としては、源典侍や朧月夜尚侍、あるいは六条御息所の複雑な陰翳、といった積極的な意義を持つ光源氏への贈歌がくり返し見られ、同じく女側からの贈歌が目だつ花散里の場合は、そうした色恋の激しさとは逆に、どこか年長者らしいやさしさ、いたわりが感じられる。^④

また、高木和子氏は、花散里と光源氏の間で交わされる贈答のすべてが、花散里の贈歌から始まることに關して、「もつぱら花散里から歌を詠みかけるのは、花散里の光源氏に対する危機感や執着心の表れ、というだけでは充分ではない」と指摘される。その上で、

むしろ、光源氏からは歌を詠みかける必要のないという相手だという、光源氏の側の花散里に対する侮り、軽視を読み取るべきであろう。^⑥

と、光源氏側の視点から、花散里の贈歌を詠み解かれています。また、花散里が、光源氏に対して歌を贈り続ける女君として造形されているのは、

花散里は光源氏に關わる、その他大勢の女君の典型として位置づけられる。そうした光源氏の女君たちの中での相対的な位置づけの軽さのために、花散里から和歌を詠む、という贈答の形式が繰り返されるのではないだろうか。^⑦

と、濔標巻で語られる二条院構想などを加味した上で、「光源氏の女君たちの中での相対的な位置づけの軽さ」のためだと結論付けられている。

同様に、花散里の贈歌を光源氏側の視点から考察されているものに、高野晴代氏の論考がある。高野氏は、花散里が光源氏に対して歌を贈り続けることに關して、

光源氏側から見れば、花散里は自身が贈ることなく、贈られなくては返歌すればよく、その意味ではありがたい妻であった。^⑧とされる。その上で、花散里の贈歌には、

「濔標」巻では、光源氏に和歌を先に贈るといふやさしさが描かれていた。六条院に入る以前は、贈歌でも挑発性は少なく、六条院に迎えられた以降、「蛩」巻や「幻」巻の贈歌において、彼女の心の奥には、夫への「わきまえる」ことのできない深い思いがあることを、和歌の表現は隠さずに語っていた。^⑨

というように、花散里の贈歌には、「やさしさ」や心の奥にある「深い思い」が込められているとされる。

また、鈴木日出男氏は、「源氏を相手に異例の女からの贈歌を詠むというのも、だじじな特徴^⑩」であるとしたうえで、次のように述べられている。

しかしそれは、顧みない源氏に強く訴えたりというような抗

議や挑発を意味しない。むしろそれとは逆に、相手との信頼感を保とうとする、いわば待つ女の類型に属するであろう。その証拠として、その贈歌には、自己を見つめる内省的な発想が言いこめられている。^⑪

このように、これまでの研究史において、花散里の贈歌は、花散里自身の性情の問題として、また、花散里から歌を贈られる光源氏の視点からする評価の問題として考察されてきた。

これらの研究史を踏まえたくうえで、さらに、『源氏物語』における女からの贈歌を考察していこうとするとき、特に、歌がどのような場で詠まれていたのかということに留意して考えてみたい。

例えば、益田勝実氏は、「贈答歌の大部分は、慣習化された生活儀礼的なことばでない日常の会話」であると指摘されている。

益田氏が指摘される「慣習化された生活儀礼的なことばでない日常の会話」という理解についての検討はなお必要であろうが、『源氏物語』の贈答歌を考える上で、重要な指摘である。

なぜなら、平安時代において、歌はその歌が詠まれる場と強く結びついていたからである。例えば橋本不美男氏は、

また王朝の和歌は、貴族の宮廷を中心とする生活集団のなかで、その日常の実生活に則して生み出されていることも確かであろう。従って、前述のように貴族の生活が、公私ともに、個

人の一生の通過儀礼を縦軸とし、暦・年中行事等による生活規則を横軸として支えられる以上は、平安朝の和歌創作の意識・発想または礎地なりに、この行事的なものが入り込むのは当然であろう。^⑫

と考察されている。また、久保木哲夫氏も、

平安和歌の特質をひとこと言えば、「折の文学」であると私は考えている。「折」とは、歌の詠まれる場を意味する。いつ、どこで、どんな状態のもとで、その歌は詠まれたのか、いわば歌を詠むにあたって作者や享受者のおかれているシチュエーションであるが、季節や、天候や、人間関係、あるいは彼らの心理状態などまで含めて、さまざまな要素がその「折」にはかかわっている。^⑬

と指摘されているところである。(傍点ママ)

『源氏物語』の和歌が、登場人物の自己表現や感情の発露であるという点は間違いない。しかし、同時に、当時の社会において和歌が生活規則や慣習と結びついていたということを考慮に入れる必要があるだろう。このことは、花散里の贈歌を考える上で重要になってくる。

二

須磨巻の冒頭で、光源氏は、「世の中いとわづらはしくはしたなきことのみまされば」^①と、自らを取り巻く政情を恐れ、須磨へと蟄居することを決意する。そして都から須磨へと向かう前に、左大臣家や藤壺、東宮方といった人々に出立の挨拶をする。

花散里と光源氏の最初の贈答は、そのような状況の中で交わされる。

「短の夜のほどや。かばかりの対面もまたはえしもやと思ふこそ。事なしにて過ぐしつる年ごろも悔しう、来し方行く先の例になるべき身にて、何となく心のどまる世なくこそありけれ」と、過ぎにし方のことどもたまひて、鶏もしばしば鳴けば、世につつみて急ぎ出でたまふ。例の、月の入りはつるほど、よそへられて、あはれなり。女君の濃き御衣に映りて、げに濡るる顔なれば、

月影のやどれる袖はせばくともとても見ばやあかぬ光を
(花散里)

いみじと思ひたるが心苦しければ、かつは慰めきこえたまふ。
「行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空ながめそ(光源氏)

思へばはかなしや。ただ、知らぬ涙のみこそ心をくらすものなれ」などのたまひて、明けぐれのほどに出でたまひぬ。

(②須磨・二七五―六頁)

明け方近くなり、鶏がたびたび鳴く後朝の別れの時間が迫ってきたので、光源氏は花散里のもとから退出しようとする。そんな光源氏に花散里が詠みかけたのが、「月影の」歌である。

『源氏物語』において、男女の逢瀬の場面で、女から男に対して歌を詠みかけるものには、例えば、若菜下巻で、紫上のもとへ行くうとする光源氏に対して女三の宮が贈った「夕露に」歌がある。

昼の御座にうち臥したまひて、御物語など聞こえたまふほどに暮れにけり。すこし大殿籠り入りにけるに、鯛のはなやかに鳴くにおどろきたまひて、「さらば、道たどたどしからぬほどに」とて、御衣など奉りなほす。「月待ちて、とも言ふなるものを」と、いと若やかなるさましてのたまふは憎からずかし。「その間にも」とや思すと、心苦しげに思して立ちとまりたまふ。

夕露に袖ぬらせとやひぐらしの鳴くを聞く聞き起きて行く
らん(女三宮)

片なりなる御心にまかせて言ひ出でたまへるもらうたければ、ついで、「あな苦しや」とうち嘆きたまふ。

待つ里もいかが聞くらむかたがたに心さわがすひぐらしの

声(光源氏)

など思しやすらひて、なほ情なからむも心苦しければとまりたまひぬ。

(④若菜下・二四八〜九頁)

女三の宮の歌を聞いた光源氏は、「あな苦しや」と感じ、「待つ里も」の歌を返し、女三の宮のもとに留まっていた。

ここで注目したいのは、この贈答が交わされているのが、「蝸のはなやかに鳴く」夕暮の時間帯だということである。

通常、男女が逢瀬を交わしたのち、男が女のもとから出ていくのは明け方近くの時間帯と決まっている。

このように明け方よりも早く出て行くとする男を引き留めようとする際に、女が男に歌を詠みかける例は、他作品の中にも見られる。例えば、『蜻蛉日記』では、

寝待ち月の山の端出づるほどに、出でむとする気色あり。さらでもありぬべき夜かなと思ふ気色や見えけむ、「とまりぬべきことあらば」など言へど、さしもおほえねば、

いかがせむ山の端にだにとどまらで心も空に出でむ月をば
(道綱母)

返し、

ひさかたの空に心の出づといへば影はそこにもとまるべき

『源氏物語』女からの贈歌考

かな(兼家)

とて、とどまりにけり。

〔蜻蛉日記〕上巻・一二二頁

と、月が出たばかりの頃に帰ろうとする兼家に対して、道綱母が、「いかがはせむ」歌を詠んでいる。また、『和泉式部日記』では、

近う寄せたまひて、「今宵はまかりなむよ、たれに忍びつるぞと、見あらはさむとてなむ。明日は物忌と言ひつれば、なからむもあやしと思ひてなむ」とて帰らせたまへば、

こころみに雨も降らなむ宿すぎて空行く月の影やとまると
(和泉式部)

人の言ふほどよりもこめきて、あはれにおほさる。「あが君や」とて、しばし上らせたまひて、出でさせたまふとて、

あぢぎなく雲居の月にさそはれて影こそ出づれ心やは行く
(師宮)

とて帰らせたまひぬるのち、ありつる御文見れば、

われゆゑに月をながむと告げつればまことかと見に出でて
来にけり(師宮)

とぞある。
(『和泉式部日記』三八頁)

というように、早々に帰ろうとした師宮に対して、和泉式部が「こころみに」歌を詠みかけている。

このように、後朝において、女が先に歌を詠みかける場合、それ

は自分のもとを去ろうとする男を引き留めようとするものであり、男も女の歌に返歌をし、その場に留まっている。

須磨巻では、「明け方近く」「鶉もしばしば鳴けば」とあるように、後朝としてふさわしい時間帯である。

ここで、考えてみたいのは、この須磨巻に描かれている場面が後朝の場面というだけでなく、都から須磨へと離れていく光源氏と、都に残される花散里の別れ、つまり離別の場面でもあるということである。

藤岡忠美氏は、花散里の歌「月影の」に関して、次のように指摘されている。

花散里の詠歌のうちの「袖はせばくとも」は、彼女のいま置かれている立場を自ら謙退して言うものとして、地の散文とのつながりが濃い。折からの月光を源氏になぞらえ、見飽きることのない月光をとどめておきたいと願うのは、庇護者の源氏を讚美する思いのつよさをあらわしている。一首は後朝の別れ難さをうたう趣きであり、わずかに離別歌の性格に連なっている。^⑩

逢坂にて、人を別れる時に、よめる 難波万雄
相坂の関し正しき物ならば飽かずわかる、きみをとどめよ

(離別・三七四)

紀宗定が東へまかりける時に、人の家に宿りて、あか月に
出で立つとて、まかり申しければ、女、よみて、出だせり
ける
よみ人しらず

(離別・三七七)

えぞ知らぬ今心みよ命あらば我やわする、人や訪はぬと
源実が、筑紫へ湯浴みむとてまかりける時に、山崎にて別
れ惜しみける所にて、よめる
命だに心かなふものならば何かわかれのかなしからまし
白女

(離別・三八八)

藤原惟岳が、武蔵介にまかりける時に、送りに、逢坂を越
ゆとて、よみける
貫之

(離別・三九〇)

かつ越えてわかれも行かあふさかは人だのめなる名にこそあり
けり
『古今和歌集』の離別歌は、都を離れていく人に対して別れを惜
しみ、悲しむ内容の和歌を贈るという形式が不可欠だった。それは
すなわち離別における挨拶の型が存在しているということではない
だろうか。

ところで、別れの場において、送り出す側が先に歌を詠み、送り
出される側が歌を返すという形式は中古以前から見られる。例えば、

土橋寛氏は、酒宴歌謡において民謡の「立歌」「送り歌」という様式的な理解が必要だと説かれている。土橋氏は、「立歌」とは「酒宴が終わって退出する時、客人側から歌う挨拶の歌」であり「主人側からは名残を惜しんで客を引き留める」のが「送り歌」であると定義されている¹⁷⁾。

このような歌のあり方から須磨巻に戻って考えてみると、花散里の歌「月影の」は、主題が下句の「もとめてみばやあかぬ光を」にある。その主旨は、光源氏を「ひきとめておきたい」ということに尽きる。この挨拶の型を用いた詠み方の中に花散里の光源氏に対する情愛が滲むのである。だから、花散里は「いみじ」という様子を隠さず、それを感じ取った光源氏は、彼女を慰めるのである。つまり、挨拶という型の中に心情が託されるところに、花散里の贈歌の特質が見いだされるのである。

そしてこのような特質は他の花散里の贈歌からもみることができ

三

濡標巻において、内大臣となった光源氏は、「五月雨のころ、公私もの静かなるに、思しおこし¹⁸⁾」て花散里のもとへと訪れる。次の贈答は、久しぶりに花散里のもとを訪れた光源氏と、そんな光源氏

を迎え入れる花散里の間で交わされる。

月おほろにさし入りて、いとど艶なる御ふるまひ尽きもせず
見えたまふ。いとどつつましけれど、端近ううちながめたまひ
けるさまながら、のどやかにてものしたまふけはひいとめやす
し。水鶏のいと近う鳴きたるを、

水鶏だにおどろかさずはいかにしてあれたる宿に月を入れ
まし（花散里）

といとなつかしう言ひ消ちたまへるぞ、とりどりに捨てがたき
世かな、かかるこそなかなか身も苦しけれ、と思す。

「おしなべてたたく水鶏におどろかばうはの空なる月もこ
そ入れ（光源氏）

うしろめたう」とは、なほ言に聞こえたまへど、あだあだしき
筋など疑はしき御心ばへにはあらず。年ごろ待ち過ぐしきこえ
たまへるも、さらにおろかには思されざりけり。「空ながめ
そ」と頼めきこえたまひしをりのことものたまひ出でて、「な
どて、たくひあらじといみじうものを思ひ沈みけむ。うき身か
らは同じ嘆かしさにこそ」とのたまへるも、おいらかにらうた
げなり。例のいづこの御言の葉にかあらむ、尽きせず語らひ
慰めきこえたまふ。
②濡標・二九七〜九頁

この花散里の歌「水鶏だに」に関して、『新編日本古典文学全集』

(以下『新編全集』)は、次のような注をつけている。

「月」は源氏をさす。水鶏以外には戸を叩く者もない、田園のような荒廢の邸であるとする。自卑の発想ながらも、異例の、女からの積極的な贈歌である。¹⁹⁾

はたして、『新編全集』が指摘するように、花散里の「水鶏だに」歌は「異例の、女からの積極的な贈歌である」といえるだろうか。

滯標卷の花散里と光源氏の贈答は、前述のように、久しく訪れのなかった、途絶えていた男を女が迎え入れる、という状況において交されたものである。

このような久しく訪れのなかった男に対して、女から贈ったと思われる歌は、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』に認められる。

兼通の朝臣、かれがたになりて、年越えてとぶらひて侍ければ
元平の親王のむすめ

あらたまの年も越えぬる松山の浪の心はいかゞなるらん

(『後撰和歌集』恋三・七八三)

かれにける男の思出でてまで来て、物など言ひて帰りて
よみ人しらず

葛木や久米路に渡す岩橋の中くにも帰ぬる哉

返し
よみ人しらず

中絶えて来る人もなき葛城の久米路の橋は今も危し

(『後撰和歌集』恋五・九八五、九八六)

言ひわびて二年許音もせずなりにける男の、五月ばかりに
まうで来て、「年頃久しうありつる」など言ひて、まかり
にけるに
よみ人しらず

忘れられて年ふる里の郭公なにに一声鳴きてゆく覽

(『後撰和歌集』恋六・一〇〇六)

年を経て信明の朝臣まうで来たりければ、簾越しに据へて
物語し侍けるに、いかゞありけん

中務

内外なく馴れもしなまし玉簾誰年月を隔て初めけん

(『拾遺和歌集』恋四・八九八)

詞書やそれに続く女の歌からは、久しぶりに自分の元を訪れた男
に対して、それを恨む歌を詠むことが恋愛歌の約束事であった、と
いうことが推察される。

だからこそ、この滯標卷において、花散里は光源氏に対して訪れ
が途絶えていたことを責めるような歌を詠みかけなければならない
のだろう。

言いかえれば、花散里の歌「水鶏だに」は、都へと帰った後も久
しく自分のもとへと訪れなかった男に対する女側の挨拶の歌なので
ある。もちろん、花散里の歌「水鶏だに」は、光源氏が長く自分の

元を訪れなかったことを暗に責めるような内容であるが、歌の直後にある「いとなつかしう言ひ消ちたまへるぞ」という地の文からは、それが深刻な気持ちから詠まれたものではないと読める。

花散里の心情は「水鶏だに」歌よりむしろ、形式的な贈答を交わした後の「などで、たくひあらじといみじうものを思ひ沈みけむ。

うき身からは同じ嘆かしさにこそ」という述懐にあるだろう。場にそった歌を詠む花散里はそうであるからこそ、歌そのものに自分の心情を素直に詠むことはしないのである。

四

花散里が、行事や時節といった折を意識した歌を詠んでいることは、次の蜚巻で交される贈答からもわかる。

今はただおほかたの御睦びにて、御座なども別々にて大殿籠る。などてかく離れそめしぞと殿は苦しがりたまふ。おほかた、何やかやとも側みきこえたまはで、年ごろかくをりふしにつけたる御遊びどもを、人づてに見聞きたまひけるに、今日めづらしかりつることばかりをぞ、この町のおほえきらきらしと思したる。

その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめ今日やひきつる
(花散里)

『源氏物語』女からの贈歌考

とおほどかに聞こえたまふ。何ばかりのことにもあらねど、あはれと思したり。

にほどりに影をならぶる若駒はいつかあやめにひきわかるべき(光源氏)

あいだちなき御言どもなりや。「朝夕の隔てあるやうなれど、かくて見たてまつるは心やすくこそあれ」と戯れ言なれど、のどやかにおはする人ざまなれば、静まりて聞こえなしたまふ。床をば譲りきこえたまひて、御几帳ひき隔てて大殿籠る。け近くなどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に思ひ離れはてきこえたまへれば、あながちにも聞こえたまはず。

(③蜚・二〇八〜九頁)

五月五日、端午の節句の折に、夏の町で騎射の遊びが行われた後、光源氏が花散里のもとを訪れた際、花散里は光源氏に対して「駒もすさめぬ」歌を詠みかける。

この花散里の歌「駒もすさめぬ」について、『新日本古典文学大系』は、「駒もすさめぬ」は騎射にちなむ「駒」でもあるが、男に顧みられぬ女の類型表現²⁰⁾としたうえで、

異例の女君からの贈歌で、顧みられなくなった女の孤独をさりげなく詠む。²¹⁾

と、花散里の贈歌を「異例」のものとし、「顧みられなくなった女

の嘆き」を読み取っている。

確かに「駒」「すさめぬ」という表現は、「男に顧みられなくなった女の常套表現として歌に詠まれる」²²。

しかしここで重要なのは、この歌「駒もすさめぬ」が五月五日という時節に、騎射の御遊びが行われた夏の町の主人である花散里が、光源氏に対して詠みかけたという点ではないだろうか。

例えば、池田節子氏の次のような指摘がある。

「何ばかりのこともあらねど」(傍線③)と語り手から評されているが、「あやめ」「駒」は五月五日の騎射にふさわしく、

「ひき」は「牽き」と「引き」の掛詞で、それぞれ「駒」と「あやめ」の縁語である。神楽歌を踏まえ、引歌もあり、充分技巧的ではないかと思われる。ともあれ、率直に自分の御殿が晴れがましかったことを喜んだ歌であり、それゆえ、源氏も「あはれ」と思ったのであろう。²³

池田氏の指摘は、「駒もすさめぬ」歌を理解する上で重要である。事実、五月五日の端午の節句、騎射や根合といった折を意識して詠まれている歌は、勅撰集や私家集の中にみられる。

五月五日に、はじめたる所にまかりてよみ侍りける 恵慶
香をとめてとふ人あるをあやめ草あやしく駒のすさめざりける

(『後拾遺和歌集』夏・二〇九)

永承六年五月五日殿上根合による 良違法師

筑摩江の底の深さをよそながら引けるあやめの根にて知るかな

(『後拾遺和歌集』夏・二二〇)

五月五日に人のもとにつかはしける 和泉式部

ひたすらに軒のあやめのつくぐと思へばねのみか、袖かな

(『後拾遺和歌集』恋四・七九九)

なかの夏、五月五日

こまなべてすさめぬさはあやめぐさ今日にあはずはなほやかにまし (『元真集』・七)

五月五日、庭に馬をひかせて見る

わかごまのとさもみるべくあやめ草ひかぬさきにぞけふはひかまし (『順集』・二三〇)

藤侍従、五月五日、まるなるしやうぶやるとて

こまだにもすさめずといふあやめ草かかるはきみがすさびとぞきく

返し

あやめだにかかるはひとにひかれけりみぎはにそへるきみやなになり (『義孝集』・三七、八)

これらからは、五月五日に行われる根合や騎射といった行事に際して和歌を詠む慣習があったことがうかがえる。また、「あやめ」

「駒」といった言葉から、神楽歌「其駒」を踏まえた歌の詠み方があつたこともうかがえる。

このことからいえば、池田氏が指摘されるように、花散里の歌「その駒も」は五月五日の騎射という時節や行事に相応しい歌だといえる。

蜚卷の場面に戻して考えてみると、たしかに、花散里の歌「その駒も」と光源氏の歌「にほごりに」は、男に顧みられなくなった女がその嘆きを詠み、男がそれを否定するという贈答の形を為しているともみえる。

しかしながら、自らの夏の町で行われた五月五日の騎射の行事に寄せて、「駒」「あやめ草」といった語、そこから連想される催馬楽「其駒」を踏まえた表現を踏まえながら詠んでいる花散里の歌を、単純に「男に顧みられなくなった女」が詠んだ恋愛の歌として理解してよいのであろうか。

五

花散里と光源氏の最後の贈答は幻巻で交される。

夏の御方より、御更衣の御装束奉りたまふとて、
夏衣たちかへてける今日ばかり古き思ひもすすみやはせぬ
(花散里)

『源氏物語』女からの贈歌考

御返し、

羽衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいとど悲

しき(光源氏) (④幻・五三七頁)

この花散里の歌「夏衣たちかへてける今日ばかり古き思ひもすすみやはせぬ」の下の句には、「古き思ひ(火)も涼みやはせぬ」とするか「古き思ひも進みやはせぬ」とするかで古注釈以来、解釈に揺れがある。

いずれにしても、ここで考えてみたいのは、花散里が光源氏に対して、「夏衣」歌とともに「御更衣の御装束」を贈っているという点である。この点に関して、『新編全集』は次のように注釈をしている。

四月一日(夏)、十月一日(冬)に、衣装や室内の調度類を替える行事。その折、妻は衣装を新調して夫に贈るのが例。源氏の衣装は、紫の上が主に調製してきた。

更衣の行事において、「妻は衣装を新調して夫に贈るのが例」であるという指摘は重要である。花散里は、「更衣」という行事に合わせて、光源氏に「夏衣」歌と装束を贈ったのである。

花散里は、装束などを贈る際に歌を添え付けけるという当時の慣習に従ったのである。

『源氏物語』内でも、女君が男に対して装束を贈る際、歌を添え

ている場合がみられる。例えば、明石巻、光源氏がいよいよ明石から都へと旅立つ場面における、明石の君の歌がある。

入道、今日の御設け、いとかめしう仕うまつれり。人々、下の品まで。旅の装束めづらしきさまなり。いつの間にかしあへけむと見えたり。御よそひは言ふべくもあらず、御衣櫃あまたに荷さぶらはす。まことの都の苞にしつべき御贈物ども。ゆ

ゑづきて、思ひよらぬ隈なし。今日奉るべき狩の御装束に、

寄る波にたちかさねたる旅衣しほだけしとや人のいとはむ

(明石の君)

とあるを御覧じつけて、騒がしけれど、

かたみにぞかふべかりける逢ふことの日数へだてん中の衣

を(光源氏)

とて、「心ざしあるを」とて、奉りかふ。

(②明石・二六八〜九頁)

明石の君の歌「寄る波に」は、「狩の御装束」と共に光源氏に贈られたものであり、歌に「旅衣」という衣に関する語が詠み込まれている点で共通している。

また、末摘花巻では、

「かの宮よりはべる御文」とて取り出でたり。「ましてこれはとり隠すべきことかは」とて、取りたまふも胸つぶる。陸奥国

紙の厚肥えたるに、匂ひばかりは深う染めたまへり。いとよう書きおほせたり。歌も、

からころも君が心のつらければとはかくぞそほちつつ

のみ(末摘花)

心得ずかたぶきたまへるに、つつみに衣箱の重りに古代なる、うち置きておし出でたり。

①末摘花・二九八〜九頁

というように、元旦の装束を光源氏に贈った際の末摘花の歌がある。また、このような慣習は、例えば、夕顔巻では、光源氏が空蟬に小桂を返す際に贈った「逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖の朽ちにけるかな」^②や、宿木巻で薫が中の君に装束を贈る際に添えた「むすびける契りことなる下紐をただひとすちにうらみやはする」^③などがあり、女性に限ったことではなく、男女に共通する社会的な慣習であったことがうかがえよう。

つまり、幻巻でも、花散里は更衣という折に、妻が夫に装束を贈るといふ慣習に基づき、装束を贈る際に歌を添えている。そのため、結果として贈答の形式では光源氏に対する贈歌となっている。すなわち、そこには、花散里側の嫉妬や危機感というものは含まれていないだろう。なぜなら、花散里の歌「夏衣」は、当時の慣習に添いながら、紫上を失った悲しみに暮れる光源氏の心を慰めようとするものだからである。

まとめにかえて

本稿では、花散里の贈歌を考察対象として花散里と光源氏の贈答を考察対象として、男側の和歌を用いたきっかけを持たない花散里の贈歌について検討した。

花散里は決して和歌を詠むことで自分の心情そのままを表そうとはしていない。彼女は、離別・行事や折といったその場面に相応しい和歌を詠んでいるのであり、結果的にそれらすべてが花散里から光源氏への贈歌になっているのである。

『源氏物語』の和歌の特質を登場人物の心情表現とだけ括ることはできないだろう。ここの場面や状況を踏まえながら読み解くことが必要だと考える。

注

- ① 拙稿『源氏物語』贈答歌考——いわゆる女からの贈歌をめぐる——『同志社国文学』第八三号、二〇一五年一月、同『源氏物語』女からの贈歌考——六条御息所を例として——『同志社国文学』第八四号、二〇一六年三月。
- ② 花散里の贈歌には須磨巻の「荒れまざる軒のしのぶをながめつつしげくも露のかかる袖かな」があるが、この歌は消息に書かれた和歌であり、物語上にはかかれていない光源氏の情報と贈歌があったことも予想され

『源氏物語』女からの贈歌考

るこの事例は今回の考察の対象とはしない。

- ③ 鈴木一雄「日記文学における和歌（その2）——女からの贈歌——」『王朝女流日記論考』至文堂、一九九三年、第五章、七七〜八五頁。（初出：『源氏物語の和歌』『国文学』第二三卷第六号、学燈社、一九六八年五月。）
- ④ ③に同じ。
- ⑤ 高木和子「花散里・朝顔の姫君・六条御息所の物語と和歌」『源氏物語の歌と人物』翰林書房、二〇〇九年。
- ⑥ ⑤に同じ。
- ⑦ ⑤に同じ。
- ⑧ 高野晴代「花散里・明石の君／六条院に迎えられた妻」久保朝孝編『私たちの光源氏』新典社、二〇一四年、第四章。
- ⑨ ⑧に同じ。
- ⑩ 鈴木日出男「花散里の歌」『成蹊国文』第四五号、成蹊大学文学部日本文学科、二〇一四年三月。
- ⑪ ⑩に同じ。
- ⑫ 益田勝実「和歌と生活——『源氏物語』の内部から——」『国文学解釈と観賞』第二四巻第五号、一九九九年四月。
- ⑬ 橋本不美男「王朝和歌史の研究」笠間書院、一九七二年、二二三頁。
- ⑭ 久保木哲夫「折の文学 平安和歌文学論」笠間書院、二〇〇七年、三頁。
- ⑮ ②須磨巻、一六一頁。
- ⑯ 藤岡忠美「離別歌の贈答——源氏物語「須磨」の場合」『平安朝和歌一読解と試論』風間書房、二〇〇三年、後編、第一章、四二五頁。（初出：『須磨巻 離別の構造』『講座・源氏物語の世界 第三巻』有精堂、一九八一年。）

- ⑬ 土橋寛『古代歌謡の世界』塙書房、一九六八年、一四二頁。
- ⑭ ② 濤標巻、二九七頁。
- ⑮ 『新編日本古典文学全集 源氏物語②』小学館、一九九五年、二九八頁。頭注四。
- ⑯ 『新日本古典文学大系 源氏物語②』岩波書店、一九九四年。四三六頁。注一一。
- ⑰ ⑳ 同じ。
- ㉑ 「男に顧みられなくなつた女」の類型表現としての「すさめぬ」「駒」の歌は次の歌に代表される。
- よみ人しらす
大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし
又は、さくら麻の麻生の下草
- 躬恒
題しらす
生ふれども駒もすさめぬ菖蒲草かりにも人の来ぬがわびしき
- 〔拾遺和歌集〕卷十二・恋二・七六八
- また、『古今和歌六帖』では「大荒木の」歌の作者を「をのこまち」としている。
- ㉒ 池田節子「源氏と花散里の対面場面」『日本文学』第六〇巻第三号、二〇一一年三月。
- ㉓ 『孟津抄』（『源氏物語古注釈集成 第五巻』桜楓社、一九八一年）、『玉の小櫛』（『本居宣長全集 第四巻』筑摩書房、一九六九年）、山岸徳平校注『日本古典文学大系 源氏物語 四』（岩波書店、一九六二年）、二〇七頁。頭注二五）、玉上琢彌『源氏物語評釈 第九巻』（角川書店、一九六七年。一五一―一二頁）など。
- ㉔ 『花鳥余情』（『源氏物語古注釈集成 第一巻』桜楓社、一九七八年）、
- 『細流抄』（『源氏物語古注釈集成第七巻』桜楓社、一九八〇年）、『新編日本古典文学全集 源氏物語④』（小学館、一九九六年。五三七―八頁。頭注一三。）など。
- ㉕ 『新編日本古典文学全集 源氏物語④』小学館、一九九六年、五三七頁。頭注一一。
- ㉖ ① 夕顔巻・一九四―五頁。
- ㉗ ⑤ 宿木巻・四三八―四四〇頁。
- 〔付記〕 本稿で使用した『蜻蛉日記』『伊勢物語』『源氏物語』和泉式部日記の本文は『新編日本古典文学全集』に拠り、引用の際は文末に巻数・巻名・頁数を示した。また、（ ）内の人物名は発話者あるいは歌の詠者を示す。『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』の本文はいずれも『新日本古典文学大系』を、私家集に関しては『新編国歌大観 第二版 CD-ROM 版』に所収されているものを用いた。なお、引用論文や本文の――は私的に附したものである。